

いわき湯本病院

症 例 概 要 患者：50歳代 男性

病名：前立腺癌、多発骨転移（L1骨転移に伴う両下肢麻痺）、骨盤内リンパ節転移

入院期間：令和4年9月下旬 ～ 令和4年10月下旬

経過：妻と高校生の娘と3人暮らしをしており、自宅で歯科技工士を開業していた。2022年6月末より腰痛あり、8月くらいから歩行困難出現し、前医へ精査目的で入院となり、前立腺癌を原発とする多発骨転移による両下肢麻痺と診断を受ける。突然の前立腺癌の診断、継続する腰痛等により前医では積極的にリハビリが進まず尿器とオムツ使用の状態ですぐに当院へ転院となる。ご本人の腰痛への不安の軽減、環境設定による安楽な立位、妻の介護に対する不安の解消などにより1ヶ月入院期間により片松葉杖で歩行自立し、床上動作も可能となり日中独居での生活獲得し退院となった症例。

内 容

妻と高校生の娘と3人暮らしで、自宅で歯科技工士を開業しており車の運転も自立していました。2022年6月末より腰痛出現し、様子を見ていたところ、8月初旬から歩行困難となり、改善しない為、前医受診し精査目的で入院となりました。初診時PSA：79.90ng/mLと異常高値であり、前立腺生検にて前立腺がん（グリソンスコア（GS）：4+5(highest score)）の診断となりました。また歩行困難はL1骨転移性病変に伴う両下肢麻痺が原因とされましたが、整形外科的な治療は行わず経過観察の方針となりました。

前医では8月上旬よりリハビリ開始となり、下肢筋力ilio 1/0,abd 2-/2-,Quad 1/1とかなり低値を示していました。突然前立腺癌の診断を受けた事によるショック・不安、妻は看護師として就業しており仕事と介護の両立に対して難色を示していたことなど、自宅への退院を希望しづらい状況で、継続する腰痛などにより前医ではリハビリにも積極的に取り組めず、尿器とオムツ使用の状態ですぐに当院へ転院となりました。当院転院時の筋力はilio 3/2,abd 2/2 ,Quad 4/3と改善はみられていましたが、起立に介助を要する状態であり、今の自分の姿を見せたくないという動画の撮影にも拒否的でした。

当院転院後はご本人の不安を軽減する為、環境を設定する事で比較的楽に起立が可能である事を経験していただくとともに、下旬には当院に月1回来院頂いている大学教授に相談し骨転移は造骨性骨転移である可能性が高く、荷重は可能であるとアドバイスを受けた事でご本人の不安も軽減しリハビ

リテーションに対して前向きに取り組んでいただけようになりました。発症前までは娘を高校まで車で送迎しており、現在は自転車で苦勞して通学している為、何とかして車で送れるようになりたいと新たな希望が聞かれるようになり、約2週間ほどのリハビリで歩行器での歩行が可能となり、3週目には片松葉での歩行と床上動作の自立が可能となりました。妻は自宅に引き取る為には看護師を辞める覚悟をしており退院に消極的でしたが、ご本人の動画を見ていただくことで涙を流して喜ばれ日中独居でご本人に過ごしていただく事を決意して10月下旬自宅へ退院する事となりました。

初めは口にしなかった不安を親身に対応することで引き出し、不安を解消する事でリハビリへの意欲を高め、短期間での改善につながった症例でした。